

駿河湾のサクラエビ漁師が昨年から強い濁りを指摘する静岡市清水区蒲原の工場放水路の水は、今年に入っても濁りは消えない。由比港漁協の宮原淳一組合長は1日の記者会見で周辺の泥の成分調査結果を発表し、富士川上流域にある雨畑ダム(山梨県早川町)の汚れについても言及した。ただ、濁りの原因は分からないまま。一方、河川に整備したダムから流れ出る土砂と、海の漁業被害の関係が注目された先例が日本海の富山湾にある。



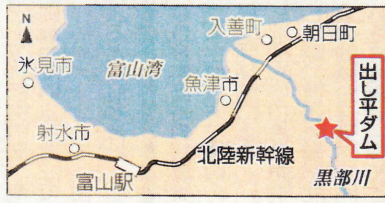
富山湾ルポ



資料を手に、排砂による漁業被害を語る泊漁業協同組合の脇山正美組合長(左) 11月16日、富山県朝日町

ダムから土砂「海がダメに」

訴訟の漁業者ら 駿河湾にも関心



漁師側

黒部川上流の出し平ダム湖底に堆積している倒木や落ち葉由来の排砂により富山湾に大量に流入したことでヒラメやワカメなどの漁獲量が極端に減少。関電は注意義務を怠ったため漁師らの漁業行使権を侵害した不法行為責任がある。

関西電力側

微粒子などは比重の軽い河水水とともに海面付近を沖合まで流されると考えるのが自然。漁場に沈殿・堆積する量はわずか。しかも漁場に存在する微粒子全てが出し平ダム由来のものであるわけではない。排砂中の水質調査もしており、水生生物に影響はない。

富山地裁判決

出し平ダムの排砂は浅い海域の海底に、自然な出水とは異なる浮泥ないしぬかるみ状の泥の堆積を生じさせている。養殖ワカメの不漁は、海域に浮遊する泥による日照不足または浮遊する泥が藻体に付着したことによる成長不良などによるものと推認できる。

※名古屋高裁金沢支部で後に和解

静岡市清水区蒲原の工場放水路から駿河湾(左)に注ぐ濁水。由比港漁協の漁師たちは「富士川上流域の雨畑ダムから導水管を経て流れ込んでいる可能性がある」と主張する11月21日、静岡市清水区(本社へ「ジェエロ1号」から)



「生態系の変化を今も感じている」。富山県朝日町の泊漁業協同組合の脇山正美組合長(57)は1月中旬、排砂による富山湾の影響を振り返り、真顔で記者に語り掛けた。

富山湾に注ぐ黒部川上流の出し平(だしだいら)ダムは毎年夏、年間を通して堆積した土砂を数日かけて下流に排出する「排砂(はいさ)」を行っている。同町などの漁師ら計13人とワカメ栽培組合は2002年、排砂が富山湾のヒラメや養殖ワカメなどの漁業に損害を与えたとして、ダム設置者の関西電力に対し、排砂差し止めなどを求める訴訟を富山地裁に起こした。一番は「ワカメ収穫

の不漁の原因は海域に浮遊する泥による日照不足または泥が藻体に付着したことによる成長不良によるもの」と認め、関電側に2728万円の支払いを命じた。訴訟は11年、二審名古屋高裁金沢支部で原告らの高齢化などの問題が立ちふさがり、漁業者が排砂監視に関する箱3箱分の資料が保

ることと和解。結局、出し平ダムの排砂とすでに廃棄した養殖ワカメ以外の漁業被害の因果関係は認定されず、排砂差し止めも認められなかった。

一面が茶色く濁る海の写真、ヘドロが積もる海底の映像、脇山組合長の自宅には今も、排砂の影響を示すミカン箱3箱分の資料が保管されている。裁判では和解はしたものの、ヒラメなどの不漁は続く。脇山組合長は膨大な訴訟資料を読み返し、唇をかむ。「このままでは富山湾はダメになってしまう」

原告代表だった入善町の漁師の佐藤宗雄さん(70)も、駿河湾に関心を寄せる。海流が西から東に流れる富山湾。排砂被害を主張していたのは主に黒部川の河口以東の漁業者だ。しかし近年は、西側からも排砂の影響を懸念する声が高まる。裁判は終わっても排砂の影響は続いている。関電広報室は「ダムの水位低下速度を制御してSS(浮遊物質量)のピークを低くするなど、環境負荷の軽減に努めている」とコメントした。

特集10面

関電広報室は「ダムの水位低下速度を制御してSS(浮遊物質量)のピークを低くするなど、環境負荷の軽減に努めている」とコメントした。